

復興支援とアート

—九州北部豪雨 災害流木再生プロジェクトを中心に—

知足(ともたり) 美加子/九州大学 芸術工学研究院

はじめに

自然災害からの復旧・復興にあたって、地域に根付く文化風習をないがしろにすることはできない。なぜなら、地域文化を理解することは、被災者の「感情の連続性」を守ることに繋がるからである。自然災害のカタストロフは、人間のあたりまえの日常を寸断してしまう。被災者は、ある日突如として「昨日と繋がらない今日」を生きることを強いられる。被災者の命に寄り添うには、衣食住の充足、環境復旧や生活再建、医療面のケアなど多方面からのサポートが必要である。その中には「心」に関するアプローチも含まれる。当事者はもちろん、当事者以外の人々も含めた「意識」や「イメージ」への働きかけである。筆者は、その役割を担うもののひとつに「アート」があると考えている。アートは人々の意識を喚起・継続させ、新たな関係性や価値を生み出し、より生きやすい方向に歩き出す契機を与えてくれる。本稿では、芸術実践者である筆者の活動事例をもとに、復興支援とアートの関係について考察する。主に木に対するイメージに働きかけ、地域をエンパワーメントする創造的実践について述べるものである。

2017年7月5日、九州北部豪雨災害が起り、約21万トンの流木が被害を拡大するという事態となった。被災地(福岡県朝倉市・東峰村、添田町、大分県日田市)では、特に木に対して恐怖や怒りといった感情が向けられがちだった。九州大学では、災害直後より異分野の研究者が結束し「九州北部豪雨災害調査・復旧復興支援団」として被害の調査や復旧に取り組んだ。芸術工学研究院では、建築やデザイン、アートを中心に「災害流木再生プロジェクト」を行うこととなった。木に対する負の感情を少しでも軽減し、復興につなげようとする取り組みである。

被災地は森林や河川に近接した地域である。木および森林の恵みである水に対する被災者の不信感が、離村を加速する可能性もある。復興は、環境や生活の復旧だけでなく、地域への愛情を基盤にした「心の復興感(レジリエンス)」が必要である。被災地は、英彦山(ひこさん)修験道文化圏にあり、古来より木と水を文化的、精神的な支柱としてきた地域である。本稿では、アートによる復興支援のための「意識」や「イメージ」への働きかけとして以下の3つの視点から述べる。

- 1、心の復興感：不安や緊張の緩和、レジリエンスの回復
- 2、地域文化の再評価：矜持の創造
- 3、忘却への抵抗：意識継続、関心を集める

1については、「熊本震災支援・板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」、「九州北部豪雨災害流木再生プロジェクト」(第1章)、2については英彦山(ひこさん)修験道文化(第2章)、3については「二風谷(にぶたに)プロジェクト」「中越地震・山古志村プロジェクト」「東日本大震災・福岡エルフの木/希望の牧場」等の創造的実践の事例を紹介する(第3章)。

1. 心の復興感

意識という目に見えないものが、現実を復興へと動かす力となる。中越地震(2004年)における復興検証報告書では、復興における地域の「気持ち」の重要性が述べられている。

「自然災害を目の当たりにした時、大災害に対する無力感や喪失感から、どうしても気持ちが立ち止り、なかなか前に進む元気を持つことが難しくなってしまいます。(中略)建物が100%再建されたというような数値によるものではなく、市民の感覚的な復興感が大切であり、人が前に進もうとするその気持ちが『復興』を前進させ、現実のものとしていくのだと考えます¹」

1 「小千谷市復興計画長期検証(総括)」2016年p.21

<http://www.city.ojiya.niigata.jp/uploaded/attachment/4128.pdf>(2018年4月30日確認)

中越地震(2004年)で被災した山古志村は、河道封鎖によって土砂災害に見舞われ離村を余儀なくされた。しかし、震災の翌年に行われた伝統行事「角突き(牛同士の闘牛)」が人々を励ました。祭りという伝統文化が地域の結束力を高め、復興に寄与することが再認識されている。帰村に向けての意識作りに尽力したため、2015年の帰村率は約5割となっている。当時の山古志村村長・長島忠美が「2年で帰村しよう」と目途を示したことも功を奏した。住民と行政が議論を重ね、復興への意識作りを行った。

2017年の九州北部豪雨災害は、大規模な山林崩壊と河川氾濫をとまなうものだった。大量の流木が発生し、その殆どはバイオマス化されることとなった。流木や土砂が損壊を拡大したことは、森林や河川、特に「木」に対する人々の恐れを生み出した。地域の自然環境への不信感が、帰村を阻みかねない事態となっている。林業関係者は自らの森林被害だけでなく、流木に対する人々の負の感情に深い心痛を負った。このような状況をふまえて、芸術工学研究院では木を中心とした地域感情や意識にアプローチする「災害流木再生プロジェクト」を行うこととなった。アートプロジェクトは、人との出会いが活動の方向性を決めることが多い。豪雨災害の前年に起こった熊本震災復興支援活動において、安藤邦廣(建築家)や杉岡世邦(杉岡製材所)と出会っていたことが本活動の契機となった。

(1) 熊本震災支援「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」

2016年4月14日-16日、熊本地震が起こった。余震回数が多かったことが、避難者の車中泊を増加させる原因となった。震災の犠牲者266人のうち「災害関連死」は211人となり、震災時の直接死50人の4倍となった。「エコノミークラス症候群」(肺塞栓症など)も含めて車中泊後に亡くなった人は少なくとも33人とされる。福島建築士(辺見美津男)が熊本震災をうけて次のようなメッセージを投げかけた。「震災の時は、その人に寄り添い心の叫びを聞き、見えないものへの想像力を養うことが大切である。建築家である前に、**人であれ**」²この言葉は、復興支援に関わる人間にとって最も重要なあり方を指し示している。熊本震災では度重なる余震から車中泊する被災者が多く、健康問題が深刻化する傾向にあっ



(図1)「西原習合堂」2016年



(図2)「損壊家屋廃材による木工品」2016年



(図3)「西原村ヒノキの伐採、枝落とし体験」2016年

2 辺見美津男「JIA九州支部緊急会員集会講演」2016年4月23日アクロス福岡

た。そのため、被災者の自宅敷地内に板倉構法³による避難小屋を建てる提案する取り組み「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」を行った。まさに「人である」ために、安藤邦廣を中心に、建築関係者、製材所、大工有志、ボランティアの協働により、熊本県西原村に「西原習合堂(しゅうごうどう)」(図1)を完成させた。アート関係者によびかけ、損壊家屋の廃材を再活用して木工品を作るワークショップも同時に開催した(図2)。また、森と暮らしをつなぐ復興住宅というコンセプトのもと、子供達と森づくり体験「西原村宮山ヒノキの伐採、枝落とし体験ワークショップ」を行った(図3)。森への意識を高めることが森林資源の活用を促し、防災に繋がる森づくりを可能にするとメンバーは考えていた。

(2)九州北部豪雨災害「災害流木再生プロジェクト」
 熊本震災の翌年に、大規模な山林崩壊と河川氾濫をともなう九州北部豪雨災害が起こった。熊本震災支援のメンバーである朝倉市の杉岡世邦(杉岡製材所)の森も甚大な被害をうけている。大量の流木の殆どはバイオマス化されることとなった(図4)。林業関係者は自らの森林被害だけでなく、流木に対する人々の負の感情に深い心痛を負った。杉岡は「木もまた被災している。いのちとしての木を活かす方法はないのか」と自問していた。このような状況をふまえ、芸術工学研究院では「災害流木再生プロジェクト」(建築、デザイン、アートの分野で流木を活かしたものづくり)を行うこととなった。その中で、筆者は流木でしおりを制作する取組みを発案した(図5)。知足研究室では、学生達がデザインした災害流木しおりをフリーマーケットアプリによって販売し義援金にあてる活動を行った。購入者のフィードバックによると、杉材の香りと手触りの魅力を述べたものが複数見受けられた。流木への恐怖の緩和として、良質なデザインとともに、杉材に直接触れ、香りを味わうといった五感へのアプローチが有効であることがわかった。

また、統廃合後閉校となる朝倉市の小学校(松末、久喜宮、志波)の児童に、校名と校章を刻んだ流木しおりをプレゼントした。創立144年の各小学校は、何世代もの地域住民に共通の話題を与えるいわば「地域の精神的支柱」であった。「小学校」を大切にすることは、過去と未来にわたる地域住民感情の結



(図4)「流木集積所(旧朝倉農業高校)」2017年



(図5)「災害流木しおり」2017年



(図6)知足美加子《朝倉龍》樟 2017年 第92回国展

3 壁塗りを行わない木造建築の伝統構法。筑波大学名誉教授の安藤邦廣が中心となり、東日本大震災における福島県仮設住宅建築に用いられた。安藤は板倉構法による熊本震災支援でも中心的な役割を担っている。

4 「災害流木再生プロジェクト's shop」<https://fril.jp/shop/a035f6bd2066ac4fa8d7fcc62e29905c> (2018年4月29日確認)

節点を守ることに繋がる。そこで筆者は、樹齢 132 年の樟の流木の彫刻《朝倉龍》(図 6) を制作し、統廃合後の杷木小学校に寄贈する。水の守り神である龍をモチーフとし、今後の水害に対する子供たちの不安を軽減することを意図している。彼らが地域を好きでいてくれば、地域住民の帰村の可能性が増し、未来はある。

朝倉の松末地区は、最も被害が大きかったところのひとつである。松末小学校は避難所となり、児童だけでなく近隣住民の命を豪雨災害から守った。小学校近くには、上部からの流木を松末小学校側に流れないようにせき止めていた杉(杉岡所有の森林)があった。災害後も立っているが、防いだ流木を片づけるために切られている。筆者は、この杉材と校庭の小石を使って「松末の木と石の時計作りワークショップ」を行った(図 7)。子供達の手の中で木が大切なものとして生まれ変わり、新しい時間を刻んでほしいと願った。本ワークショップは、参加者が主体的に対象(木材)に手間と時間をかけることによって、負の感情を受容や愛情へと導く可能性を示してくれた。



(図 7)「松末の木と石の時計」2017 年

2. 英彦山修験道における木の文化

九州北部豪雨災害による文化財被害は 26 件あった(表 1)。福岡県の文化財被害は 11 件、そのうち 4 件が天然記念物の樹木であった。福岡県添田町の町指定天然記念物「吉木の山桜」(図 8)も豪雨で倒壊している。添田町ではクラウドファンディングを利用して、この山桜の彫刻を作り、彦山駅に設置しようとしている。日田彦山線(添田から夜明)は未だ災害通行止めが続いており、鉄道開通への願いを込めて彫刻設置をしたいという。その彫刻制作を筆者が請け負うこととなった(図 9)。この事例のように、樹齢を重ねた木の命が不本意に途切れたとき、それを活かしたいという心情が働くのはなぜだろうか。

復旧・復興にあたって、地域の文化を理解することは、場に根付く感情の連続性を守る上で重要である。九州北部豪雨被災地は、英彦山修験道文化圏との関わりが深い。修験道は、古来より自然そのものを神仏と考え自然を護持した。英彦山は水分神(みくまりのかみ)とよばれ、水資源と、水を担保する木を大切にしてきたところである(筆者は英彦山山伏・知足院の末裔)。多くの場合、神棚のお札の中には木が入っている。また日本には海外より圧倒的に木彫仏が多い。私たち日本人は古くから木に対して祈ってきたのである。

	福岡県	大分県
1	普門院本堂 (国指定重要文化財)	早野家住宅 (国指定重要文化財)
2	杷木神籠石 (国指定史跡)	長福寺本堂 (国指定重要文化財)
3	堀川用水及び朝倉揚水車 (国指定史跡)	行徳家住宅 (国指定重要文化財)
4	久喜宮のキンメイチク (国指定天然記念物)	旧矢羽田家住宅 (国指定重要文化財)
5	朝倉市秋月伝統的建造物群保存地区 (国選定重要伝統的建造物群保存地区)	廣瀬淡窓旧宅及び墓 (国指定史跡)
6	秋月城跡 (県指定史跡)	ガランドヤ古墳 (国指定史跡)
7	古塔塚のナンジャモンジャ (県指定天然記念物)	石坂石畳道 (県指定史跡)
8	シュロ巻製作 (県選定保存技術)	日田市豆田町伝統的建造物群保存地区 (国選定重要伝統的建造物群保存地区)
9	久保島の石造桁橋 (朝倉市指定有形文化財)	豆田まちづくり歴史交流館、旧古賀医院・旧船津歯科 (国選定重要伝統的建造物群保存地区)
10	塔ノ瀬観音の森 (東峰村指定天然記念物)	岩尾家住宅 (旧日本丸製薬所) (国登録有形文化財)
11	吉木の山桜 (添田町指定天然記念物)	山田家住宅 (国登録有形文化財)
12		井上家住宅 (国登録有形文化財)
13		井上酒造 (国登録有形文化財)
14		小鹿田焼の里 (国指定重要文化的景観)
15		小野川埋没林 (国指定天然記念物)

(2017年9月時点) 福岡県教育庁、日田市教育庁調査

(表 1)「九州北部豪雨災害による文化財被害状況」2017 年(筆者作成)



(図 8)「倒壊した吉木の山桜」2017 年



被災地の東峰村(英彦山の麓)には「行者杉」(図 9)「山桜による彫刻下絵(花開童子)」という樹齢 200 年から 600 年、約 4.68ha にわた

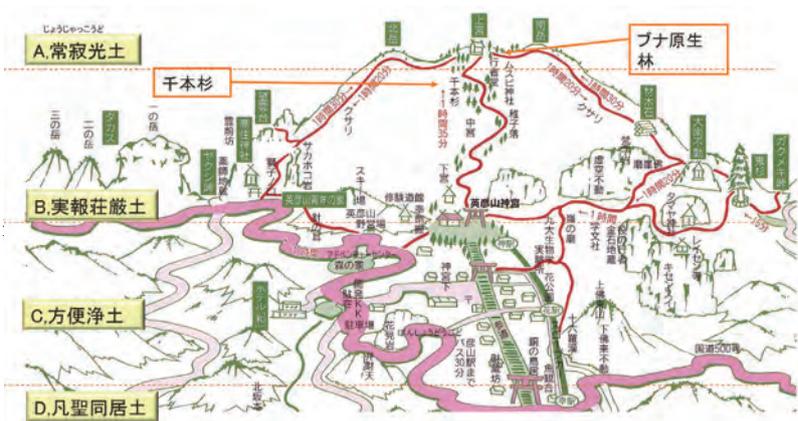
5 材料の丸太材は、九州大学の藤本登留准教授によって木口で切っても割れないよう長時間乾燥されている。

る 375 本の杉の巨木群がある。英彦山山内には「千本杉」(図 10)と呼ばれる杉林、樹齢約 1200 年の「鬼杉」(図 11) など、修験者が植樹したとされる杉が多数存在している。修験者の十界修行のひとつとして「出生灌頂」がある。これは仮の死を経て、山から新しい命を授かる(擬死再生)儀式である。生まれ変わった修験者は、先祖を思いながら枝を投げた(植林した)という。このような文化思想が、九州における挿し木技術の普及に影響を与えたと筆者は考えている(英彦山は明治以前、九州一円に 42 万戸の檀家をもち大きな影響力があった)。

英彦山の神領を七里四方とよび、鎌倉期以前は九州北部豪雨災害被災地を含む地域が、守護不入の英彦山管轄地であった。水資源への信仰が里民の寄進を促し、英彦山はどの藩にも属すことなく独立を保った。英彦山山伏の自然護持の姿勢は、「四土結界」という思想にも表れている。結界とは宗教的な忌避を伴うゾーニングのことである。英彦山は標高 1199m あり、これを一定の標高毎に 4 つに区分する。これは修行による精神的な成長段階と対応しており、最上部の結界 A「常寂光土」は峰入り(約 40km 間を歩く十界修行)を 15 回修めた山伏しか立ち入りを許されず、汗や涙など水を汚す行為を厳重に慎む必要があった。ブナの原生林を保護する。結界 B「実報莊嚴土」は人が住む家を建てることを禁じ、千本杉が植林されている。結界 C「方便浄土」には山伏の住まい(坊)が約 800 戸あり、里の檀家の来訪を受け入れていた。結界 D「凡聖同居土」は五穀栽培が禁じられていたが、山伏以外の人間も居住が許されていた。結界思想は、神仏である自然を守ることに役立った。山内の木は、山外からの持ち出しを禁じられていた。

修験道は、神仏習合を旨とし、神道や仏教を組み合わせ多様な価値観を共存させた。これも自然が信仰対象であったことから成立した概念であろう。例えば木彫仏は、「仏という対象」を「神の依り代としての木」を用いて彫っており、仏と神を同時に拝むことは矛盾しないのである。また山中他界観では、亡くなった魂は山を登って土や木や水に還り、神仏(自然)と一体化するという。自然を思考の中心におけば、先祖崇拝や神仏への信仰は、違和感なく共存できるのである。先祖信仰とは特別な宗教ではなく、木と水の恵みを理解し、感謝できる人々の自然な感情だといえる。木や水の恵みは一朝一夕で生まれるものではなく、先祖の尽力があってこそ享受できるからである。

このように木や水に対する物語を再評価することが地域資源となり、住民の矜持を高め、前を向く力に繋がると筆者は考えている。2018 年 4 月に、個人寄贈として被災地(朝倉市松末と添田町吉木)に山桜を植樹した(図 12)。その際、松末の森を所有する杉岡世邦が語った「芸」の象形文字は、木を植える形である」という言葉に感銘を受けた。森林は、枯葉や屍などの死を集積しながら菌根菌(植物と共生する菌類)によって緻



(図 10)「英彦山四土結界」添田町役場地図に筆者加筆



(図 11)「英彦山鬼杉」樹齢約 1200 年



(図 12)「植樹された山桜(中央)」2018 年

密なネットワークを張り巡らせ、樹々間で協力し、命を生み育んでいく⁶。土に命を宿す植樹はまさに創造的であり、芸術の根幹をなす感受性を与えることを実感した。

今後は、朝倉市黒川(室町時代の英彦山修験道座主居住地)にある「共星の里(廃校利用の美術館)」と協力し、流れ着いた巨石や流木を活かした庭を制作する「黒川復興ガーデンとバイオアート」を行う。英彦山修験道および禅の庭(図13)に習い、粘菌(森に生息する菌類)なども取り入れ企画・提案を行う(英彦山には雪舟が造園した禅庭がある)。「命」を潜思し、心安らぐ空間を共同で創造するプロジェクトである。



(図13)「雪舟庭園(英彦山旧亀石坊)」1476年

3. 忘却への抵抗

(1) 二風谷プロジェクト

自然環境があってこそ文化が伝承されるという考え方は、アイヌ民族の方々との「二風谷アートプロジェクト(1999年)」を通して学んだことでもある。北海道の二風谷ダムは、アイヌ民族が生活をしてきた土地に建設された。アイヌ民族である貝澤耕一と萱野茂は、国のダム計画に対して「二風谷ダムを盾として、人間としての権利を求め」訴訟を起こした(2008年までアイヌの先住性が認められていなかった)。「文化はモノ」とする国側と、「文化は自然環境」とし、自然と共に生きてきた先住性を認めてほしいとするアイヌ側の裁判である。1997年に「ダムは違憲である」との判決を得たにも関わらず、ダムは施工されてしまう。地域の歴史文化を意識しない開発や復旧復興は、住民の矜持や精神的支柱を奪うことにもなりかねない。携わる人間には、地域文化への理解と畏敬が必要である。



(図14) 知足美加子《回想 - 二風谷ダム》1998年、富永賞

筆者は、二風谷で受け継がれてきた文化と営みを五感で感じ、考え始める仕組みが必要と考えた。ダム横にある貝澤所有のシケレペ農場に筆者の彫刻作品を設置し、その台座作りのサポートを不特定多数の方に呼びかけた。プロジェクト参加者は納屋に寝泊まりし、援農しながら制作を行った。アイヌ民族の先住性を示す銘文や作品設置を協働で行うという取り組みの中で、この土地で受け継がれてきた記憶の存在を、人々の心に何度も立ち上げたいと願った。

(2) 中越地震支援・山古志村

中越地震(2004年10月23日)の際、山古志村は孤立し、河道封鎖によって土砂災害に見舞われた。震災の翌年に行われた伝統行事「角突き(牛同士の闘牛)」が人々を励ましたという記事を読み、山古志村に向かった。宿泊した旅館「丸新」の主人の話で、彼が先代から横綱牛を育てていたことを知った。震災時は牛舎が斜面ごとで滑り落ちたところもあったそうだ。ペットの犬のために最後まで村に残ったこと(動物を連れて避難してはいけなかった)。再び村に戻ったときは、死んだ錦鯉などの死臭の上を、カラスが舞い地獄のようだったこと。メディアではわからない筆者の想像を超えたことがおこっていた。そのような状況下で、「角突き」という伝統的な祭りが地域の結束力を高め、復興を後押ししたこと



(図15) 知足美加子《山古志の角突き》2010年、損保ジャパン美術財団奨励賞

6 Suzanne Simard.(2016). *How trees talk to each other*; https://www.ted.com/talks/suzanne_simard_how_trees_talk_to_each_other?utm_campaign=ios-share&utm_medium=social&source=email&utm_source=email#t-3838(2018年4月30日確認)

に感銘を受けた。その後、筆者は角突き牛と錦鯉の彫刻を制作し寄贈している。やまこし復興交流館「おらたる」(2014年～)は震災の記憶や地域の魅力を伝える場所であり、被災者がここから語り部として派遣される制度もある。「おらたる」とは、「私たちの場所」という意味であり、山古志村の矜持と地域愛がこめられた象徴となっている。

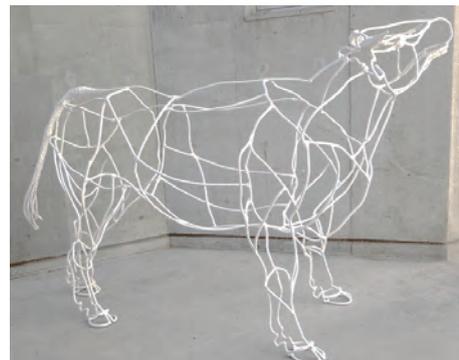
(3) 東日本大震災支援、福島県浪江町・希望の牧場

山古志村に牛の彫刻を寄贈した経験から、東日本大震災直後(2011年)、福島県の原発立入禁止区域内に残された牛の映像に見入ってしまった。牛達は突然地域から失せた人間側に向かって「なぜ?」と問いかけているような瞳をしていた。手間暇をかけた田畑や自宅、動物たちと別れ、故郷を後にした人々の辛



(図16) 知足美加子《水と風》
2012年、損保ジャパン選抜奨励展

苦に思いを馳せた。いつか帰ると信じて離れた人。いつか帰ってくると信じている牛、家、風景。その視線が交差するところにあるのは、様々な記憶と日々のリズムが染み込んだ「故郷」である。昨日と今日が繋がらないという亀裂を、私たちはどう生きればいいのかであろう。帰るべき場所が過去ではなく「未来」にあることをイメージして、鉄の彫刻《望郷の牛》を制作した。立入禁止区域内である浪江町には、吉沢正巳が運営する「希望の牧場」がある。彼は牧場の牛を殺処分せず、生かし続けることで原発に依存する社会に異を唱えている。2012年にこの牧場に作品を寄贈した。その際、延々と続く無人の町の異様さに息を飲み、牧場で牛がくつろぐ姿をみてホッとしたことを思い出す。吉沢はトレーラーにこの作品をのせ「原発を乗り越える社会」を各地で訴えているという。《望郷の牛》は、私の作品の中で(公開されながら)最も移動したものではないだろうか。鎮魂と、力強い未来への提言の旅を続ける彼を応援している。



(図17) 知足美加子《望郷の牛》2012年

(4) 東日本大震災支援「福岡エルフの木」

2011年3月11日、東日本大震災における福島第一原子力発電所事故は、世界に大きな衝撃を与えた。特に筆者は、被災地の妊産婦や子供達の状況に思いを馳せていた。私事になるが、9.11同時多発テロ(2001年)のショックで自らの出産が大幅に遅れた経験をもっていたからである。不安や動揺などの心理的負荷は、妊産婦や子供達の心身に影響を与える。そこで、被災地を継続的にエンパワーメントする姿勢や心を届ける方法として発想した取り組みが「福岡エルフの木」である。福岡県糸島産の無農薬野菜を、福島県(郡山市、白河市、いわき市)の助産施設、子育て支援施設、および仮設住宅へ、週一回送付する活動である(2011年から現在まで継続)。2016年4月の熊本震災からは、熊本の有機野菜を福島に送付している。福岡と、福島、熊本をあたたかい意識でつなぐことを念頭において活動している。活動名は絵本『かたあしだちょうのエルフ』から発想を得ている。ダチョウのエルフは子供たちを助けたのち、彼の涙は泉に、体は木となり荒野の動物たちに憩いの場を与え続ける。実は、この絵本にインスパイアされたダチョウの彫刻の制作中に、東日本大震災が起きた。災害に関わりながら、真摯に生きる人々の姿がエルフの木に重なり、本活動の着想を得た。



(図18) 知足美加子《エルフの木》
2011年

心を砕いた点は、「忘れていない」というメッセージを、無理なく長く送付し続ける「仕組み」を作ることであった。野菜到着時に送られてくる支援先の近況報告や画像は、その都度 Web で紹介している。報道に取り上げられることが少なくなったからといって、被災地の状況がすべて解決したわけではない。報告の中で垣間見え

る彼・彼女たちの考えや生き抜く姿を伝えていくことも活動の一部である。(http://elfinfukuoka.blog.jp/)

おわりに

本稿では、復興支援とアートとの関係について、芸術実践者である筆者の活動事例を中心に述べた。アートを通じた取り組みの中で、特に「木」を中心とした創造的実践について述べた。

まず「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」では、余震への不安を軽減するために自宅敷地内避難としての板倉小屋建設を提案した。建築や木材関係者有志によって西原村習合堂を建て、損壊家屋の廃材で木工品づくりを行った。九州北部豪雨災害では、大量の流木による土砂災害が人々の意識に与えている影響を鑑み、木への負の感情にアプローチする「災害流木再生プロジェクト」に取り組んだ。

豪雨災害被災地が英彦山修験道文化圏であることから、木や水などの自然信仰に基づいた文化観について述べた。修験における「験」とは、繋がりと見えないものに対する想像力である。見えないものとは、微生物・有機的な生命の連鎖・自然の営み・会うことのできない祖先や子孫などを含む具体的かつ現実的なものである。自分の命のスパンを超える「水と木」は、見えないものを想像する力の結節点である。人間の寿命を越えて生きる木を中心に、山は圧倒的な生命の関係性を育んでいる。その調和の美しさは「私たち人間もまた、生命の輪の中で何度も生き直せる」と論じてくれるのである。自然環境は、強いレジリエンス(復元力)をもつ文化アーカイブと言えるのかもしれない。

さらに忘却への抵抗としての取り組みとして、アイヌ民族に関する「二風谷プロジェクト」、中越震災支援としての作品寄贈。東日本大震災支援「希望の牧場」への作品寄贈「福岡エルフの木」についても紹介した。

アートは、人々の感情を揺さぶり、心の在り様やイメージに影響を与える。人々の意識を喚起・継続させ、新たな価値を生み出し、前を向く契機を与えてくれる。私達が「復興」というとき、そこには人の「心」が含まれていることを忘れてはならない。どのようなものも、人がまず心でイメージすることから始まり、現実化するのである。アートは様々な「巻き込み」や「関わり」を生み出し「serendipity (予期せぬ幸運)」を生み出すことがある。また関わる人々に、能動的な動機付けを促す。

被災した自然環境を復旧し、倒れた木のいのちを何かに活かしたいという願う心は、被災地に限らず、森林と共に暮らしてきた日本人には共有できるものであろう。今後、「森林環境税(1人あたり年1千円)」が2024年度を軸に導入されることを鑑みると、森への意識は国民の中で高まっていくと予測される。防災を含めた森の環境整備が、国民からの委託によって行われる時代となる。経済資源としてのみ森をみるのではなく、英彦山山伏のように自然への畏敬を根幹に、森の営みと人間の意識を繋げていかななくてはならない。

これからも、筆者は、森を中心に見えないものへの想像力を養い、創造し、行動していきたい。それが、「昨日と繋がらない今日」を「あたりまえの今日」に変えていく小さな一歩になると考えている。